

前十字靭帯脛骨付着部裂離骨折に対する 観血的整復固定術の術後成績

○衣笠 和孝^(MD) (きぬがさ かずたか), 橘 優太^(MD), 生長 弥須蔵^(MD), 田中 美成^(MD)

大阪労災病院 整形外科

【目 的】

膝前十字靭帯 (ACL) 脛骨付着部の裂離骨折は骨端線閉鎖前後の若年症例に生じることが多く、鏡視下あるいは観血的整復固定術によって治療される。当院では確実に靭帯-骨移行部に Krackow suture をかけられることから、観血的整復固定 (ORIF) を選択している。今回、本術式の術後成績とその特徴を検討することを目的とした。

【方 法】

ACL 脛骨付着部の剥離骨折に対し 2007～2018 年に pull out suture 法による ORIF を施行した 20 歳未満の 20 例 (男:女/18:2, 手術時平均年齢 12.5 歳) を対象とした。これらの症例について、術後 6 カ月以降における Lachman test による前方不安定性評価と X 線または CT による骨癒合の有無と骨片形態を retrospective に検討した。

【結 果】

Lachman test は 17 例 (85%) で陰性であった。骨癒合は 19 例 (95%) で得られていた。前方不安定性が残存した症例は、骨癒合不全 1 例と、骨癒合 2 例であった。不安定性が残存した症例では裂離骨片の骨性成分が少ない傾向であった。

【結 語】

ORIF の成績は概ね良好であったが、剥離骨片の骨性部分が少ない症例では前方不安定性の残存に注意が必要である。